具体物を活用した指導と子どもの成長や変容

教育実践研究科　教職実践専攻　教職実践基礎領域
林　佳宏

Ⅰ　主題テーマ設定理由

１　外国籍児童との関わり

愛知県は、外国籍児童生徒が５８７８人（平成２４年５月１日）と全国で一番多い県である。これは、静岡県２４８８人、神奈川県２８６３人を大きく上回っている。

その中でも、豊田市の保見団地は外国籍児童が特に多く集住している。また、現在外国籍児童は集住地区のみならず、多くの学校に在籍している。

私は、保見中学校出身である。そのため、外国籍の友達も多くいた。その経験をもとに２年前から西保見小学校の放課後支援教室「パラソル」やＮＰＯ法人「子どもの国のゆめの木教室」で主に外国籍の児童生徒を対象にしたボランティアをしている。多くの外国籍児童と関わる中で、彼らが持っている課題について次のように理解した。それは、言葉だけで説明するのではなく、子どもたちに身近な具体物を用いることで子どもの理解をより深められることである。

例えば、小学校４年生のＡさん（ペルー国籍）に夏休みの宿題で出された生活作文の書き方を支援していたときのことである。Ａさんは夏休みの間に家のお手伝いをしたことについて書こうとしていた。しかし、私が言葉でお手伝いの内容を聞いたり、引き出そうとしたりしても、Ａさんはうまく私に説明することができなかった。そこで、ペルー料理の写真が載っている本をＡさんに見せると今まで曇っていた表情がパッと明るくなり「先生、これ。お母さんと一緒に作ったセビーチェ」と私にお母さんのお手伝いをしたときの具体的なエピソードを教えてくれた。もちろん、作文も今までと比べものにならないスピードで進むことができた。私は、写真という目で見て理解できるものがＡさんの理解を深めたのだと実感した。

私は支援を続けていく中で、言葉だけではなく具体物を用い、目で見える形で示すことは外国籍児童生徒だけではなく、日本人の子どもたちの理解をより深めることにも役に立つのではないかと考えるようになった。

子どもたちが知っている身近な物を教材にした授業がつくりたい。文字を中心にした授業ではなく、目で見て理解できる授業がつくりたい。具体物を使うことで彼らの学習意欲を高めたいと考えるようになった。

２　サポーター校の実態

通常学級数１３学級、特別支援学級数２学級、全校約４００人が在籍する学校である。Ａ小学校はみよし市内では一番規模が小さい学校で、学校の近くには田んぼ、柿畑、自動車部品工場などがある。また、古くからの地区が多く保護者がＡ小学校の卒業生という家庭も多い。

Ａ小学校の子どもはとても元気がよく、多くの子どもが長放課に外で遊ぶ姿が見られる。また、子ども数人が、放課後に学校に戻ってきて校庭で遊んでいることも多い。Ａ小学校の子どもたちは、とても元気で明るいことが特徴である。しかし、元気がよすぎるあまり、落ち着きがない子どもの姿もたまに見られる。

３　配当クラスの実態

５年２組は男子１５人女子１２人、合計２７人。そのうち１人の外国籍児童（女子）が在籍している。休み時間には、ほとんどクラス全員の子どもたちが外に出て遊ぶ姿が見られる。授業では高学年ということもあり、自ら進んで発言する子どもが少ないが、グループ活動などでは積極的に自分の意見を伝えている姿が見られる。また、発言をしたときに友だちにどう思われるのかを考え、躊躇してしまう反応が見られる。

このような実態から実習Ⅰでは、子どもたち自身のよい所を多く見つけ、信頼関係を築くことで、挙手がしやすくなるのではないかと考えられる。そのため、子どもたち同士がお互いのよい所を見つけられる活動を中心に実践を行った。また、実習Ⅱでは言葉だけではなく視覚的に子どもたちが理解を深め、発言をしたくなるような工夫を具体物を用いることで行った。子どもたちに身近な具体物を用いより、子どもたちの理解が深まるよう工夫をし実践をした。

４　参考にした実践

①齋川浩実践から学んだこと

教師と子ども、子どもと子どものよりよい関係を作りだす手段として日記に朱書きをし、その朱書きを学級通信でクラス全体に広げる実践を行っていた。

朱書きをするポイントは、子どもの顔を目の前に浮かべながら書くこと、よいところを見つけてほめること、話題を提供することだと学んだ。

また、ねらいを達成できた子どもの日記にシールを貼ることで、自分だけではなく他の子どもたちが何を

書いているのか興味をもたせることができることも指摘していた。

そして、学級通信を作成するポイントは、子どもの日記から文章をそのまま抜き出し、それを通信に載せることで、仲のよい友だちだけではなく学級全体で日記に書かれた子どもの思いを共有できるのだと学んだ。

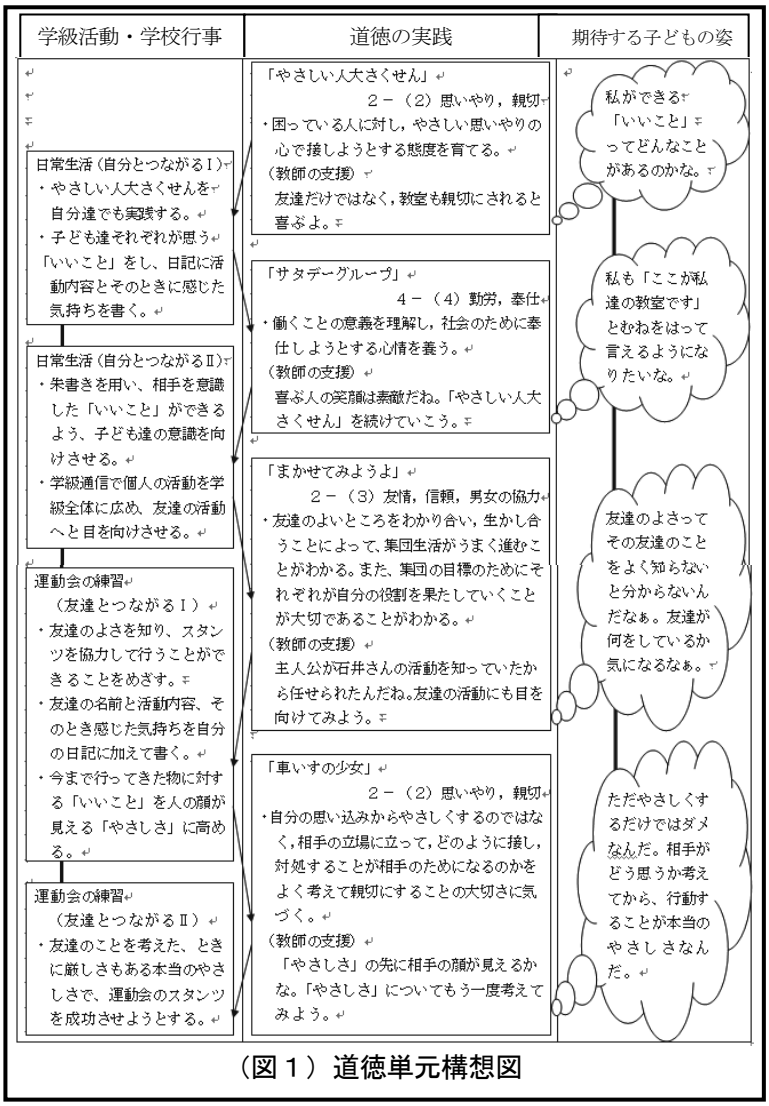
②大津和子実践から学んだこと

具体物を授業で用いるとき、どのような基準で選べば効果的に活用できるのかを学んだ。

実践『一本のバナナから』は、子どもたちにとって身近なバナナを食べることから始まる。そして、そのバナナが世界規模の課題である南北問題へとつながっていく。

教材として具体物を選択するとき、できるだけ子どもにとって身近にあるものを選ぶことが大切であり、その具体物を活用するときには、授業のねらいにあたる事柄を子ども自身に具体物から発見させることが重要だと実践記録を読み実感した。

授業で具体物を活用するときには、「子どもにとって身近な物」であり「その具体物から発見があること」がポイントだと学んだ。



（図１）道徳単元構想図

③有田和正実践から学んだこと

子どもの意欲を引き出すために具体物を活用することが効果的であると学んだ。子どもの意欲を引き出す方法は有田の教材論である「北風と太陽」だ。

教師が子どもにこれをやらせよう、あれをやらせようとすればするほど子どもはマントを着こみ消極的になってしまう。しかし、具体物という太陽をあてることで子どもは自らマントを脱ぎ、進んで行動しようとする。

具体物を活用することで子どもの意欲を引き出すきっかけを作り出せるのだと学んだ。

また、授業づくりをする場合どのような視点をもち行うべきなのかを学んだ。その視点は３つある。

①「教材研究」では教材を面白いものにするためにはどのようにすればよいか考える。②「子ども研究」では子どもが何を求めているのか研究する。③「指導法研究」はほとんどの場合教材がきちんと決まれば方法は自然とついてくると考える視点である。

授業を構想する際には、具体物のみにこだわるのではなく、常にこの３つの視点をもつことが大切であると学んだ。

Ⅱ　教師力向上実習Ⅰの実践

１　教師力向上実習Ⅰの構想

教師力向上実習Ⅰでは、帯の活動と縦の活動を組み合わせ、子どもたちを成長させることを構想した。毎日行う帯の活動は「やさしい人大さくせん」と題し１日１つ友達や教室が喜ぶことを子どもが考え実践する活動とした。これは、私の被教育体験である日本赤十字社が推進しているボランティア・サービス活動を参考にしている。

日々の流れとしては、朝の会で学級通信を紹介する。帰りの会で日記を子どもたちに書かせる。朱書きをすることで子どもの活動を把握し、相手を意識した活動になるよう支援する。学級通信を作成し、相手を意識して親切ができた記述をしている子どもを中心に紹介する。朝の会に学級通信を紹介するという流れである。

また、よく書けていた子どもの日記にシールを貼り、なぜシールが貼られているのかを子どもたちに考えさせ、自分以外の日記にも興味を持たせようとした。

学級通信では、毎回日記を３人ずつ紹介し、クラス全体で友だちがどのような活動をしているのか共有する働きをもたせた。

それに加え、学級通信で紹介した子どもには、クラス２７人全てそろうとひとつの絵が出来上がるように工夫した学級掲示用のパーツを渡し、名前を書かせて貼らせた。

縦の活動では、子ども達が毎日行う活動に意味を持たせるために１週間に１度道徳の授業を行うことを計画した。週に１度の道徳にはテーマがあり第１週目の

テーマは、「私ができる『いいこと』ってどんなことがあるのかな。」２週目のテーマは、「私も『ここが私達の教室です』と胸を張って言えるようになりたいな。」３週目のテーマは、「友達のよさってその友達のことをよく知らないと分からないんだなぁ。友達が何をしているか気になるなぁ。」第４週目はまとめとして、「ただやさしくするだけではダメなんだ。相手がどう思うか考えてから、行動することが本当のやさしさなんだ。」とした。

「やさしい人大さくせん」の期間は、１週間を１クールとし３クールの間、帯の活動と道徳を行い、第４週目に道徳の実践のみ行った。帯の活動を行った日数は、ゴールデンウィークと重なっていたため、実質約２週間である。

また、子どもたちの日記に書かれている文章がどのように変わっていくのか追っていくことで、そこに表れてくる質的な変容を分析することを計画した。

私は本構想で、毎日の言葉かけはもちろん大切であるが、目で見える形で子どもたちにフィードバックを送ることを主眼に置いた。これは、外国籍児童を支援する中で気づいた具体物の活用である。言葉という目で見えないものより朱書きや学級通信、学級掲示など子どもたちの目で見える形で頑張りを支援することが、子どもたちの成長や変容につながるのではないかと考え実践した。

２　日記指導の工夫

ア　日記指導のねらい

「やさしい人大さくせん」は１日１つ友達や教室が喜ぶことを子どもが考え実践する活動である。その活動の中心的役割をするのがこの日記指導である。日記指導では、クラス全員の子どもたちが行った活動を一人も見落とさず把握し、それぞれの段階に合わせて親切を通して友だちと関わる機会をつくることが目的である。

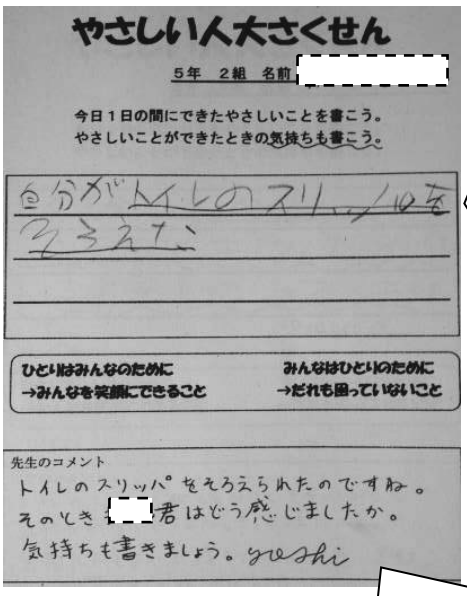
具体的には、朱書きにより親切なことをしたときに子ども自身がどんな気持ちになるのかを引き出す。その親切にする活動を通して友だちと関わる機会をつくる。親切にする活動自体によさを見つけさせ継続する意欲に結び付けることである。

また、実習の終わりに子どもたちの日記を一冊に製本することで、子どもたち自身で一カ月の成長を具体物である冊子という形で振り返ることができるようにするねらいがある。

イ　子どもの変容

Ｂ君の変容を紹介する。Ｂ君は、グループで行動をするときに周りが見えず、友だちとトラブルになることが多い子どもである。

しかし、私はＢ君のよさを引き出し、そのよさを通して友だちとうまく関わる機会を作りたいと考え、日記に朱書きを入れることで支援をした。



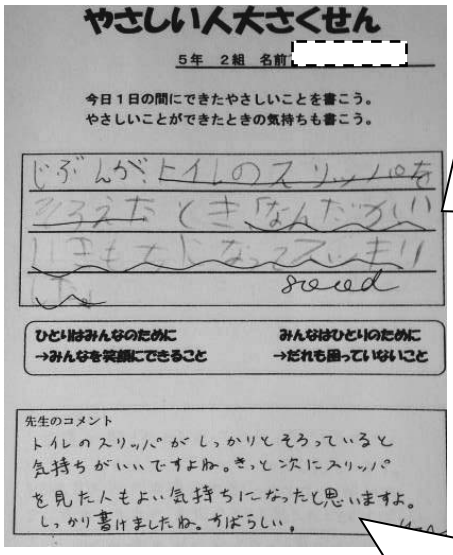
自分がトイレのスリッパをそろえた。（子どもの日記）

トイレのスリッパをそろえられたのですね。そのときＢ君はどう感じましたか。（朱書き）

（資料１）Ｂ君３日目の日記

Ｂ君は１日目にクラスで唯一日記を提出しなかった。そんなＢ君が３日目に自分から行動に移すことができた。

朱書きでＢ君が自分から行動できたことを認め、親切をしたときに感じた気持ちを引き出すことをねらった。



自分がトイレのスリッパをそろえたときなんだかいい気持ちになってスッキリした。（子どもの日記）

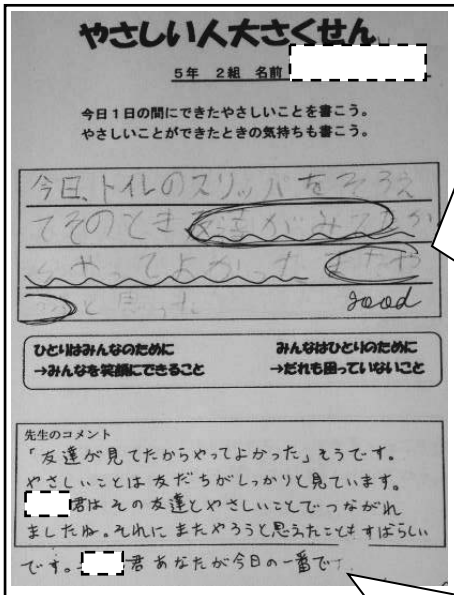
トイレのスリッパがしっかりとそろっていると気持ちがいいですよね。きっと次にスリッパを見た人もよい気持ちになったと思いますよ。しっかり書けましたね。すばらしい。（朱書き）

（資料２）Ｂ君４日目の日記

朱書きの効果があり、Ｂ君の気持ちを引き出すことができた。教師が朱書きをしたことに対して、子どもは本当に素直な反応を示してくれるのだと実感した。

朱書きでＢ君が記述した感じた気持ちを繰り返し書くことで認め、Ｂ君ができた親切な活動が次に使う人の心に届いていることに気づかせようと試みた。

次は、その親切な活動を通して友だちとＢ君を結び付けることをねらいとする。



今日、トイレのスリッパをそろえてそのとき友だちが見ていたからやってよかった。またやりたい。（子どもの日記）

「友だちが見てたからやってよかった」そうです。やさしいことは友だちがしっかりと見ています。Ｂ君はその友だちとやさしいことでつながれましたね。それにまたやろうと思えたことはすばらしいことです。Ｂ君あなたが今日の一番です。（朱書き）

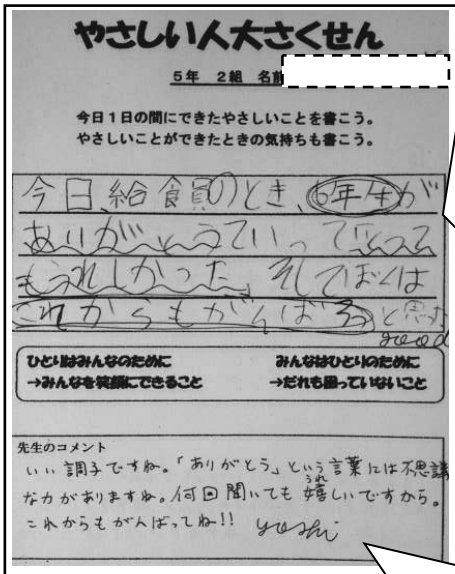
（資料３）Ｂ君５日目の日記

Ｂ君の日記が大きく変容した。今までは、文章がいつも「じぶんが・・・」で始まっていたのに対して、今回の日記ではＢ君が行った親切な活動について、友だちがどのような反応を示したのか記述されていた。

前回の日記で「次スリッパを見た人もよい気持ちになったと思いますよ」と朱書きをした効果としてＢ君が、次にスリッパを見た人に注目するという結果につながったと考えられる。また、次にスリッパを見た友だちと会話をしたことで、親切な活動を通して友だちとつながることができ「またやりたい」というＢ君の変容につながったのではないだろうか。

私は、子どもは本当に期待をかければ変わるものだと実感した。とても嬉しかった。「やってよかった。またやりたい。」私もＢ君と同じ気持ちになった。

この日記を私は学級通信に載せた。次はトイレのスリッパ以外で何か活動できないか期待を込めて声かけをした。



今日、給食委員のとき、6年生がありがとうていってとってもうれしかった。そしてぼくはこれからもがんばろうと思った。（子どもの日記）

いい調子ですね。「ありがとう」という言葉には不思議な力がありますね。何回聞いても嬉しいですから。これからもがんばってね！！（朱書き）

（資料４）Ｂ君６日目の日記

声かけをした効果としてＢ君は、トイレのスリッパ以外で親切ができるようになっていた。Ｂ君は普段給食委員会の仕事を忘れたり時間ギリギリに行ったりしていた。そんなＢ君が委員会の仕事をして「とってもうれしかった」と記述し「これからもがんばろう」という気持ちに変容したことに私は驚きを隠せなかった。

ほんの数日前まで日記を書くために親切な活動をしている様子だったＢ君が、友だちや６年生と親切な活動を通してかかわりあうことで、大きく変容することができていた。

その変容を促した一因として、学級通信を紹介したときにＢ君の日記をクラス全員の前で読み、ほめたことが効果的であったのではないかと考えられる。朱書きの効果を学級通信で深めることができた。

３　学級通信の工夫

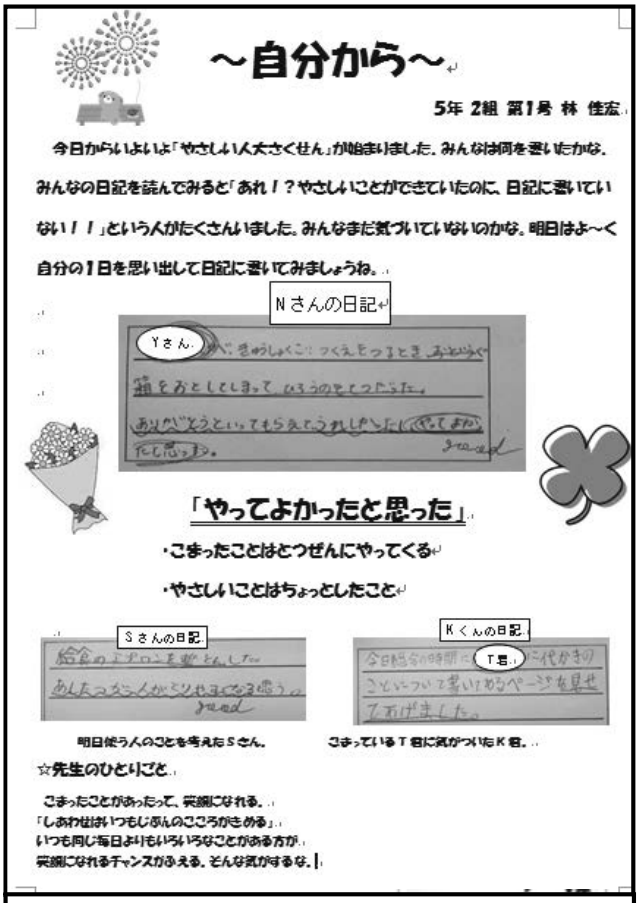
ア　学級通信のねらい

学級通信のねらいは、子どもたちが毎日書く日記をクラス全員の前で紹介することにより、仲の良い友だちだけでなく、学級全体で友だちがどのような活動を行っているかを共有することである。

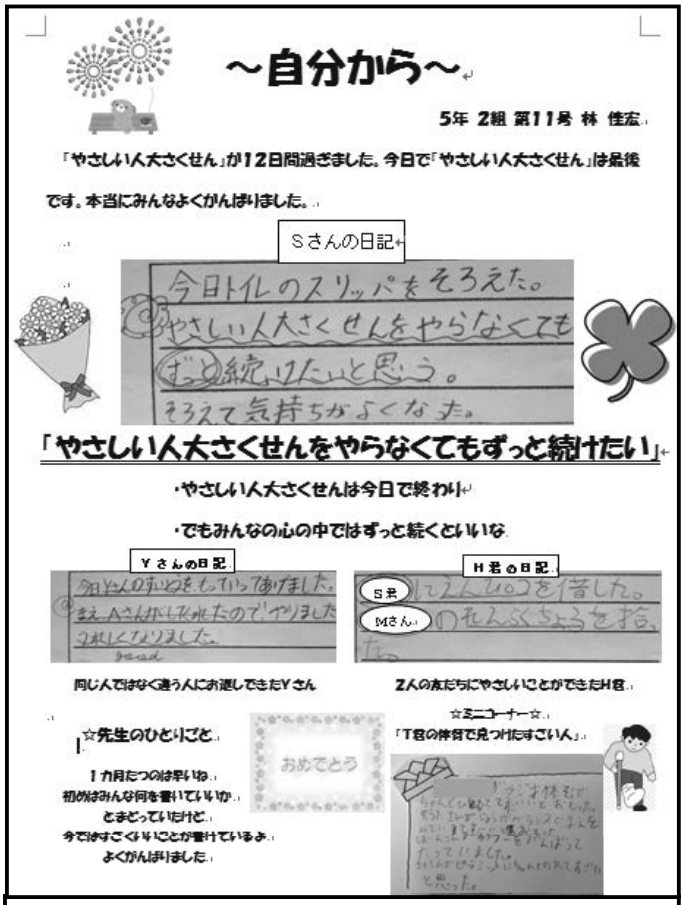
また、学級通信に全ての子どもの日記を載せることを約束している。それにより、３週間という長い期間であるが子どもたちに緊張感をもち活動を続けさせるねらいも含まれている。

それに加え、名前はイニシャルにするが、子どもの日記を写真で撮りそのまま学級通信に載せることで、自分が書いた日記に愛着をもたせる効果もねらっている。

イ　子どもの変容



（資料５）学級通信第１号



（資料６）学級通信第１１号（最終号）

Ｎさんの日記

> Ｙさんが給食後つくえをつるときお道具箱を落としてしまって、ひろうのを手伝った。ありがとうと言ってもらえてうれしかった。やってよかったと思った。

子どもたち全体の傾向として、どのようなことをしてよいかためらっている様子であった。そのため、Ｎさんの「やってよかったと思った」という言葉を学級通信の中心においた。

また、Ｓさんが給食のエプロンを明日使う人が取りやすくなるよう整頓していたこと、Ｋ君が総合の時間に友だちのＴ君に図鑑を見せてあげたことを紹介することで、「こまったことはとつぜんやってくる」「やさしいことはちょっとしたこと」という私のメッセージを子どもの言葉と結びつけて伝えた。

『先生のひとりごと』では、困ったことは嫌なことだけれど、笑顔になれるチャンスでもあることを私の言葉だけではなく、あいだみつをの詩を載せることで伝えた。

この学級通信を発行した日は、ちょうどＫ君の家庭訪問の日で、Ｋ君と保護者が喜んでいたと指導教員の先生に翌日伝えていただいた。

Ｓさんの日記

> 今日トイレのスリッパをそろえた。やさしい人大さくせんをやらなくてもずっと続けたいと思う。そろえて気持ちがよくなった。

子どもたち全体の傾向として、親切をするということが習慣化されてきたようだ。その中でも、Ｓさんのようにこれからも続けたいと考える子どもも登場した。

学級通信で子どもたちに毎日メッセージを伝えてきたことが、子どもの変容に役立ったと考えられる。

特に子どもの言葉をそのまま使い、通信のテーマとしたことで「日記で書いたことが通信にそのまま載ってる」「先生が日記で書いたことを認めてくれた」と子どもたちに感じさせることができたことが効果的だったのではないだろうか。

また、朝の会で学級通信をクラス全員の前で読み上げることが、通信に載っている子どもに自信を持たせ、日記に現れてくる子どもの記述の変容を導くことにつながったと私は考えている。

子どもの変容に注意しながら朱書きをしていると、学級通信で紹介した子どもの言葉が他の子どもの日記によく現れるようになっていた。学級通信を発行する効果として、一人の子どもが日記で書いたことをクラス全体で共有し広めていくことができると実感した。

４　教室掲示の工夫

ア　教室掲示のねらい

教室掲示のねらいは、子どもたちが行った親切を目に見える形で示すことである。教室掲示は、学級通信に載った子どもにパーツ（花火の花びら）を配りそれに自分の名前を書かせて、私が指定した場所に貼らせることで作り上げていった。子どもの名前を書かせたねらいは、２７人の子どもたちがたった１人でも欠けては完成しないことを示すためである。

また、子ども達には最終的にどんな絵ができあがるか伝えないことで、３クールの間、日記を書き続ける意欲を引き出そうと工夫した。２７人全員が学級通信に載り、クラス全員の前でほめられて初めて完成する掲示物とした。子どもたち一人ひとりの親切が毎日集まっていく様子を、具体的な目で見える形で分かるように工夫をした。

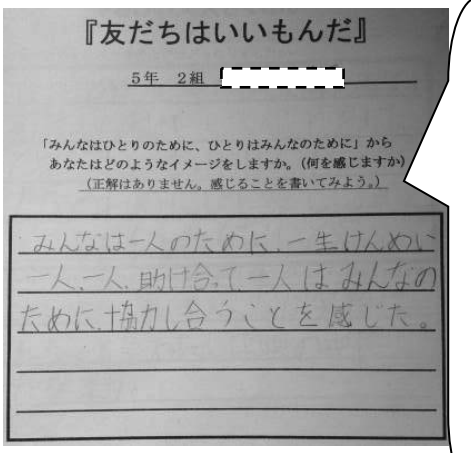
できあがった学級掲示を表紙に子どもたちの日記と学級通信をはさみ２７人分の冊子を作り配布した。

季節感が出るよう工夫した。

（資料７）「やさしい人大さくせん」の記録（表紙）
（日記と学級通信を１冊に製本したもの）

イ　子どもの変容

Ｃさんの変容を紹介する。Ｃさんは、クラスの中であまり目立つ子どもではない。また、クラス替えにより仲の良い友だちと離れてしまっている様子であった。そのため、４月当初はなかなか友だちグループに入れないでいる様子であった。私はＣさんを親切にする活動を通して、多くの子どもと関われるように支援をした。


『友だちはいいもんだ』

5年　2組

「みんなはひとりのために、ひとりはみんなのために」から
あなたはどのようなイメージをしますか。（何を感じますか）
（正解はありません。感じることを書いてみよう。）

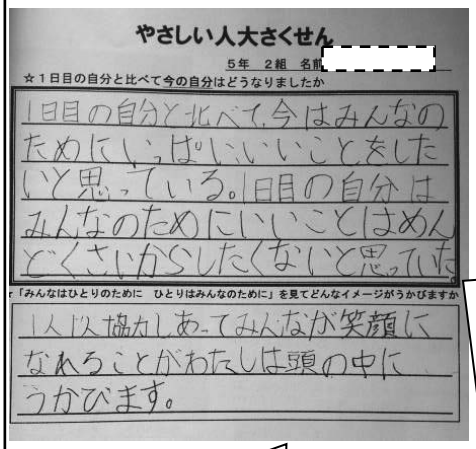
みんなは一人のために、一生けんめい一人一人助け合って一人はみんなのために協力し合うことを感じた。

（質問）「みんなはひとりのために、ひとりはみんなのために」からあなたはどのようなイメージをしますか。（何を感じますか）

みんなは一人のために、一生けんめい一人ひとり助け合って一人はみんなのために協力し合うことを感じた。（Ｃさんの記述）

（資料８）実践を行う前にＣさんが持っていたイメージ

実践を行う前にＣさんは「みんなはひとりのために、ひとりはみんなのために」という言葉に対して漠然としたイメージしか持てていなかった。


やさしい人大さくせん

5年　2組

☆１日目の自分と比べて今の自分はどうなりましたか

1日目の自分と比べて今はみんなのためにいっぱいいいことをしたいと思っている。1日目の自分はみんなのためにいいことはめんどくさいからしたくないと思っていた。

「みんなはひとりのために　ひとりはみんなのために」を見てどんなイメージがうかびますか

1人以協力しあってみんなが笑顔になれることがわたしは頭の中にうかびます。

（質問）「みんなはひとりのために、ひとりはみんなのために」からあなたはどのようなイメージをしますか。

１人１人協力しあってみんなが笑顔になれることがわたしは頭の中にうかびます。
（Ｃさんの記述）

（資料９）実践を行った後にＣさんが持っていたイメージ

Ｃさんが教室掲示に自分の名前を貼るとき、すでに貼られている子どもの名前を友だちと一緒に確認している姿が印象的であった。また、今まであまり笑顔を見せなかったＣさんが記述にも表れているように、友だちと一緒に笑顔でいる様子を見て私はＣさんが友だちとかかわりあう機会に掲示が役に立ったと実感した。

Ⅲ　教師力向上実習Ⅱの実践

１　教師力向上実習Ⅱの構想

教師力向上実習Ⅱでは、理科「植物の花のつくりと実や種子」、算数「整数」、外国語活動「What color is it」をそれぞれ１単元ずつ行った。

その中で、具体物を活用した授業づくりを心がけ、言葉だけで説明するのではなく、子どもたちに身近な具体物を用いることで子どもの理解をより深めることを目指した。

その手だてとして「教材研究」「子ども研究」「指導法研究」「子どもによる身近な具体物からの発見」を常に意識し授業づくりを行った。

理科「植物の花のつくりと実や種子」では、子どもたちが学んだことを実生活へと結びつける手だてとして具体物を活用した。

算数「整数」では、目で見えにくい倍数の関係性を目で見える形で子どもたちに示す手だてとして具体物を活用した。

外国語活動「What color is it」では、子どもたちが学習した色がどれほど身近にあるのかを示すために具体物を活用した。

２　理科「植物の花のつくりと実や種子」（８時間完了８時間目）

ア　具体物を活用するねらい

本時は、単元をまとめる１時間として「アサガオの花粉がトゲトゲしているのはなぜだとう」と題した授業を計画した。前時に顕微鏡で観察したアサガオの花粉の表面の形が、実は子どもたちの身のまわりにあるマジックテープと深い関わりがあることを発見させることがねらいである。

本時で扱った具体物は以下の視点から選び出した。休み時間が終わり教室に戻ってきた子どものズボンに『くっつきむし（ヌスビトハギ）』がついていた。子どもたちにとってヌスビトハギはみんな知っているとても身近な植物だと分かった。（子ども研究）

ヌスビトハギは、くっついたり離れたりする性質がある。私は、以前大学の講義でヌスビトハギの表面を顕微鏡で見るとカギ状になっており、その性質を利用してマジックテープが開発されたことを学習した。単元で扱ったアサガオの花粉の表面の形とヌスビトハギの表面の形に共通点を発見した。（教材研究）

ヌスビトハギを授業で活用するためには、花粉の形を確実におさえる必要がある。そのために、模型を準備し目で見える形で子どもたちに示す方法がよいのではないかと考えた。（指導法研究）

子どもたちにとってヌスビトハギとマジックテープはとても身近なものである。それに加え、アサガオの花粉の形がトゲトゲしていることを子どもたちは学習している。アサガオの花粉の形とヌスビトハギの性質からマジックテープの存在を子どもたち自身に発見させることはできないだろうかと考えた。（子どもによる身近な具体物からの発見）

イ　子どもの変容

実践の中で子どもたちがどのように変容したか紹介する。

（写真１）授業開始時の様子

授業開始時子どもたちは前を向いて座っているが子どもの視線がバラバラになっている。また、教科書を見ていたり、プリントを見ている子どもの姿も見られる。

めしべの模型（左）に花粉の模型（右）を子どもがくっつけている様子。

（写真２）めしべの模型と花粉の模型を提示したときの様子（拡大）

アサガオの花粉がトゲトゲしていることを復習した後、花粉がめしべにくっつくかどうか模型を使い確かめた。

（写真２）は、子どもがめしべの模型（先端にマジックテープを貼り付けた棒）につるつるした花粉の模型（スーパーボール）とトゲトゲした花粉の模型（デコレーションボール）のどちらがくっつくか試している様子である。

（写真３）めしべの模型と花粉の模型を提示したときの様子（全体）

（写真３）は、（写真２）と同じタイミングで教室全体をとらえた様子である。つるつるした花粉（スーパーボール）はめしべの模型にくっつかず、トゲトゲした花粉（デコレーションボール）がめしべの模型にくっつく様子に子どもたちが注目して見ている。

授業開始時（写真１）と比べ、子どもたちの視線がそろっていることが確認できる。模型（具体物）を活用したことにより子どもたちの集中力が上がったと感じた。

子どもたちから「うわー」と大きな声があがる。

（写真４）ヌスビトハギを服にくっつけている様子

トゲトゲした花粉がめしべにくっつくことを確認した後、子どもたちが知っている物でくっつくものがないが発問した。休み時間に教室で見たと伝えるとすぐに「くっつきむし」と子どもから反応があった。

ヌスビトハギを提示し私が自分の服につけると子どもたちから「うわー」と大きな声があがった。子どもたちに身近な具体物を活用した効果が教室全体で起こった「うわー」というつぶやきとして現れたのではないだろうか。

ヌスビトハギがトゲトゲしているかつるつるしているか予想を立てた。

（写真５）子どもの予想

くっつくということを手掛かりに、アサガオの花粉の形から、ヌスビトハギの表面の形を子どもたちに考えさせた。

２人の子どもがヌスビトハギの表面がどのようになっているか予想を立てた。D君は、アサガオの花粉と同じでトゲトゲしていると答えた。E君は、トゲトゲしていることに付け加えて、めしべと同じようにネバネバしていると予想を立てた。クラスの子どもたちの反応はD君説とE君説にちょうど半分ぐらいに分かれた。

子どもの予想には、意見を発表した代表２人ともアサガオの花粉の形というキーワードが含まれていた。また、めしべがネバネバしているからヌスビトハギの表面もネバネバしているのではないかという意見が子どもからでたということから、これまでに学習してきた内容と本時の学習を結び付けて考えることができたと言える。

アサガオの花粉がめしべにくっつくということからヌスビトハギがくっつく仕組みを表面の形に着目し、そこから推測することができていた。

右の子どもがマジックテープの表面の形を注意深く見ているのに対して、他の子どもは早く自分も見たい様子だ。

（写真６）マジックテープの形を確かめる様子

ヌスビトハギの表面の形がかぎづめ型になっているので服にくっつくのだと説明をした。「うわー」「すごい」と子どもたちから反応があった。ヌスビトハギが自分の服に知らない間にくっついている理由は、アサガオの花粉よりもすごいかぎづめ型をしている表面の形のためなのだと納得している様子だった。

その後で、「ヌスビトハギの表面を見た偉い科学者がある物を発明しました。１度は必ず見たことがあるものです。それは何でしょうと」発問した。「くっついて、はなれる。くっついて、はなれるもの。」とヒントをだした。

クラスほとんどの子どもの口から、以外にもあっさりとマジックテープという意見がでた。私は、嬉しさより驚きの方が大きかった。

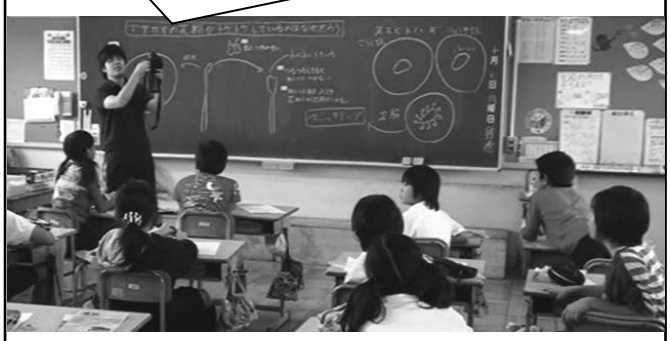
ヌスビトハギという子どもにとって身近な具体物からマジックテープという子どもが１度は見たことがある身近な具体物を関連付け発見することができていた。

マジックテープを各列に回し、ヌスビトハギのかぎ

づめ型とマジックテープの表面の形がどのようになっているのかを子どもたちに確認させると（写真６）の様子から分かるように、奪い合うほど教材に興味を持たせることに成功した。

またそれと同時に、「マジックテープの表面の形が家庭科の教科書に載ってるよ」「裁縫道具にマジックテープが入っていたような気がするな」「そういえば、くつにマジックテープがあったよ」と子どものつぶやきが聞こえてきた。

私が、生活と結び付けて考えさせる前に子どもたちはすでに進んで考えているようだった。このような反応を得られたということから具体物を活用することが、子どもたちの理解を深めることに役立ったと考えられる。



（写真７）教科と生活を関係づける

「実はみんなの身のまわりにマジックテープはたくさん使われています。何か知っていますか」と発問すると「筆箱」「くつ」「手袋」などの意見がでた。

手を挙げなかったが、すいとうをもって私に目線を送ってくる子どもがいた。よく見ると、すいとうのカバーにもマジックテープが使われていた。その子どもを「よく気づいたね」とほめた後、すいとうを借りて全体で説明した。多くの子どもがすいとうのカバーには気づいていなかった様子で「それもあったか」という反応を示した。

すいとうのカバーについているマジックテープを見せて、実際にくっつけたりはなしたりすると子どもたちは食い入るようにすいとうを見つめていた（写真７）。多くの子どもが自ら体の向きを見やすいように直し、前かがみの姿勢になっていた。中には身を乗り出して見つめる子どももいた。

子どもが知っているけれども気づいていない具体物を教材として扱ったときの反応がとてもよく、本時の実践の中で一番よい子どもの反応が見られた。

本時のねらいである「前時に顕微鏡で観察したアサガオの花粉の表面の形が、実は子どもたちの身のまわりにあるマジックテープと深い関わりがあることを発見させること」を子どもの反応から具体物を活用することにより達成することができたと考えられる。

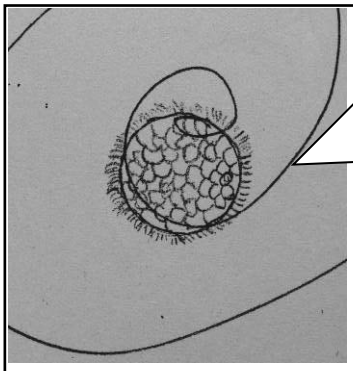
言葉だけではなく視覚的に子どもたちが理解を深め、発言をしたくなるような工夫を具体物を用いて行うことができた。また、子どもたちに身近な具体物を使うことで、子どもたちの理解が深まるよう工夫をし実践をすることができた。

Ⅳ　教師力向上実習からの学び

１　具体物を活用した実践からの学び

私が具体物を活用した授業づくりがしたいと考えるようになったきっかけは、外国籍児童とボランティアを通して関わったからであった。言葉だけで説明するのではなく、子どもたちに身近な具体物を用いることで子どもの理解をより深められるという実体験を私自身がしたからだ。また、私は具体物を活用することは外国籍児童だけではなく、全ての子どもたちの理解を深めることにつながるのではないかと考えたからだ。

私が配当されたクラスには、Ｆさんという外国籍児童（女子）が１人いる。私は、外国籍児童とボランティアを通して関わっていたこともあり、Ｆさんを変容させようと私なりに努力をした。しかし、教師力向上実習Ⅰでは日記、学級通信とも文字を中心とした支援であったためＦさんにとってハードルが高く、思うように成果をあげることができなかった。そこで教師力向上実習Ⅱでは、言葉が多少分からなくても目で見て理解できることを最大の力点とした。



（資料１０）Ｆさんのスケッチ

（資料１０）はアサガオの花粉を顕微鏡で観察したときにＦさんが描いたスケッチである。とてもよく描けている。ここまで細かく記述できたのはＦさん１人だけだった。やはり目で見て理解できる教材は外国籍児童にとってとても効果的であった。

教師力向上実習Ⅱでは、校庭に咲いているアサガオやヘチマなど実物教材をなるべく多く使うように心がけた。そして、アサガオの花粉とマジックテープの関係性をヌスビトハギを通して発見させる実践では、具体物を提示したときにＦさんも含め多くの子どもの視線を集め集中させることができた。

Ｆさんと他の日本人の子どもたちが授業に集中できたということは、私が実践主題とした「具体物を活用することは外国籍児童だけではなく、日本人の子どもたちの理解を深めることにつながるのではないか」という見通しの方向性が正しかったと言えるのではないだろうか。

２　目指す教師像

子どもたちからの手紙がたくさんつまった冊子を教育実習の最後にいただいた。

（資料１１）教育実習でいただいた冊子の表紙

私は、サポーター実習、教育実習（小学校免許）、特別課題実習、教師力向上実習Ⅰ、多様なフィールド実習、教師力向上実習Ⅱ、教師力向上実習Ⅲで多くの先生方や子どもたちと出会うことができた。それは、私にとってかけがえのない財産であり、私が目指す教師像の方向性を決める大切な指針となった。

私は、実習を通して数多くの尊敬する先生方と出会うことができた。私もこんな指導がしたい。子どもと先生みたいにかかわれるようになりたい。私にとって何通りもの目指す教師像ができた。

また、実習を通して数多くの子どもたちと出会うことができた。今でも何人もの子どもたちの顔をすぐに思い浮かべることができる。そのたびに私は、嬉しい気持ちになったり、ほんの少しあの子のよいところをもっと見つけてあげられればよかったなと後悔する。本当にいろいろな出会いがあった。

私は、これから教師として数多くの先生方や子どもたちと出会うこととなる。その出会いをよりよいものとするために一つ決めたことがある。それは、尊敬できる先生のよいところを一つでも多くまねをし、自分のものにすることである。あの実践をされていた先生の方法を取り入れてみよう。こんな指導をされていた先生を真似してみよう。あの先生が持っているオーラを研究してみよう。

私の目指す教師像はまだまだはっきりとはしていない。これから出会う先生や子どもたちに教えられてどんどん変わっていくだろう。

それでも今の時点で言うのであれば、実習でご指導いただいた先生のようになりたいと思う。子どものよさを信じ疑わない先生、子どものよさを伸ばすことに真剣な先生である。私にはまだまだ遠く、何年後に達成できるか分からない。もしかすると近づくことさえも難しいかもしれない。けれども、今の私はその目指すべき方向をしっかりと見ていると断言することができる。

【付記】

実習でご指導やご助言をしていただいた、みよし市立Ａ小学校（サポーター実習、教師力向上実習Ⅰ、教師力向上実習Ⅱ）、豊田市立Ｂ小学校（特別課題実習）、豊田市立Ｃ小学校（小学校免許実習）、岡崎のＤ学園（多様なフィールド実習）、豊明市立Ｅ小学校（教師力向上実習Ⅲ）の先生方に心から感謝申し上げます。また、実習の間に出会った全ての子どもたちの成長を心から祈っています。

最後に、いつもいつもご迷惑ばかりおかけしてしまった私をご指導して下さった中妻雅彦先生をはじめ、教職大学院でご指導して下さった全ての先生方に心から感謝申し上げます。

参考文献

・「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受け入れ状況」（文部科学省）
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/04/1332660.htm
・齋川浩「相互理解を基盤に、よりよい人間関係を築く学級集団の育成―生活ノート・学級通信の活用を通して―」（『愛知教育大学教育実践研究科（教職大学院）修了報告論集第四輯　Ｐ３１１－３２０』　２０１３）
・亀村五郎『赤ペン＜評語＞の書き方』（百合出版　１９７９）
・佐藤学『教育の方法』（左右社　２０１０）
・斎藤喜博『授業入門』（国土社　２００６）
・田中耕治『時代を拓いた教師たち』（日本標準　２００５）
・田中耕治『時代を拓いた教師たちⅡ』（日本標準　２００９）
・大津和子『１本のバナナから』（国土社　１９８７）
・有田和正『社会科授業を活性化する技術』（明治図書出版　２００４）
・有田和正『教材発掘の基礎技術』（明治図書出版　１９８７）
・宮下治『理科授業の理論と実践―子どもの「すごい！」を引き出す手作り授業―』（関東学院大学出版会　２０１１）